

消えた楽譜をついせきせよ

——めい たん てい名探偵はデュエットで

遠藤寛子 作
小林和子 絵



N.D.C. 913 消えた楽譜^{がくふ}をついせきせよ

—名探偵^{めいたんてい}はデュエノ^{デュエノ}トて

遠藤寛子 作

小林和子 絵

旺文社 1987

168p 22cm

(旺文社創作児童文学)

小学上級以上

遠藤寛子（えんどう ひろこ）

1931年、三重県松阪市生まれ。法政大学卒業。都立北養護学校教諭。1969年、『深い雪の中で』で第1回北川千代賞を受賞、1974年、『算法少女』でサンケイ児童出版文化賞を受賞。他に『米沢英和女学校』『この大をさがしてください』『あわてんぼのキューピット』『N.D.C.のなぞをとけ一名探偵はエンゼルさん』『ムガール帝国の宝をさがせ一名探偵はくいしんぼ』等、著書多数。

小林和子（こばやし かずこ）

1929年、東京に生まれる。東京美術学校（現東京芸術大学）卒業。児童出版美術家連盟、現代童画会会員。『ママってするーい』『どうぶつひょうういんは大さわぎ』『きつねと小さなおいしゃさん』『あわてんぼのキューピット』『N.D.C.のなぞをとけ一名探偵はエンゼルさん』『ムガール帝国の宝をさがせ一名探偵はくいしんぼ』等、さし絵の仕事多数。

消えた楽譜をいせきせよ

—^{めい ざん てい}名探偵はデュエットで

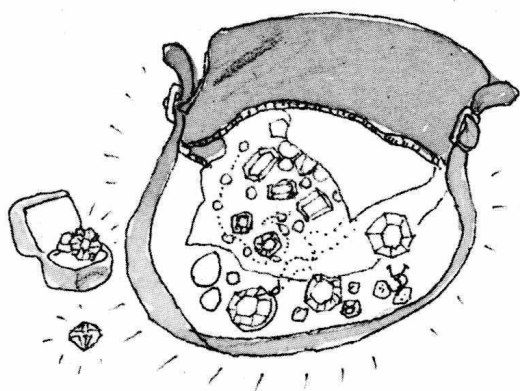
遠藤寛子 作

小林和子 絵



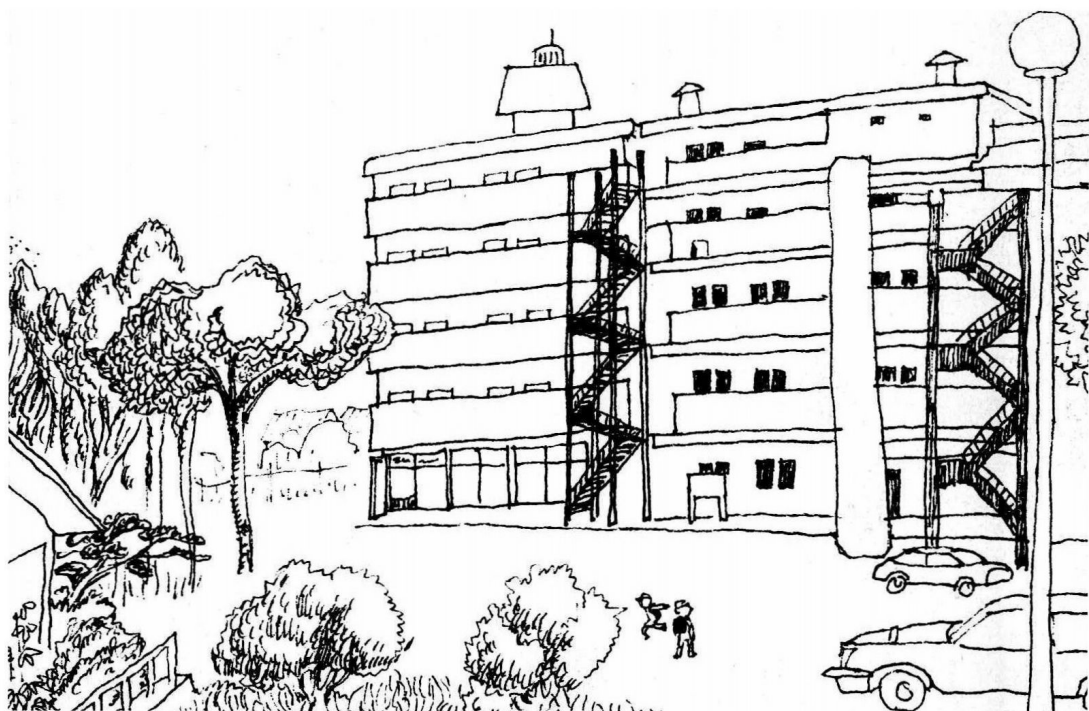
旺文社

プログラム



プレリユード(ぜんそうきょく)
(前奏曲)
7

- 1 デントウとホコリ 11
- 2 アマデウス 19
- 3 エアポート 31
- 4 チェリオ! 41
- 5 オン・ザ・ロード 50
- 6 ブルーサンデー 63
- 7 雨の午後のハプニング 71



8 ピストル? 86

9 フランスの香水 94

10 バレンタインの贈りものした? 105

11 小犬のワルツ 120

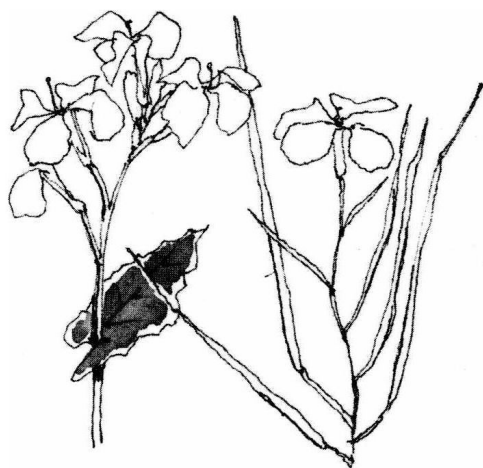
12 マジック算術 130

13 トリック見つけた! 145

アンコール 158

—あとがきにかえて—
遠藤寛子 166

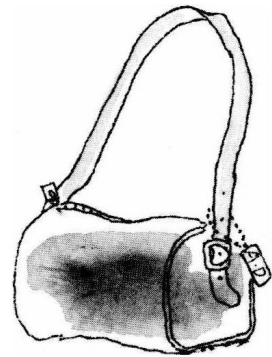




さ装
し絵
丁

小林和子

プレリユード (前奏曲^{ぜんそうきょく})



朝のニューヨーク、ケネディ空港です。

空は気持ちよく晴れわたっています。

出発時刻^{じこく}の近づいた全日本航空の東京行定期便の一機に、搭乗^{とうじょう}手続きをすませた乗客が、つぎつぎに乗りこんで行きます。

スチュワードスのお嬢^{じょう}さんが、ドアのそばに立って、にこやかにでむかえています。身だしなみのよい白人の青年が、旅なれたようすで、機内の通路を自分の座席をさがして歩いていきます。肩^{かた}からさげた黒革^{くろかわ}のショルダーバッグには、A・D^{エイ・ディー}とイニシヤルを入れた名札^{なふだ}がついています。このA・Dさんは親切な人のようです。自分の席を見つけると、つづいてとなりの席に来たおばあさんの旅行かばんを、自分のバッグ

といっしよに、座席の上の荷物入れに入れてあげました。

「ムーチャス・グラシアス。」

おばあさんがスペイン語で礼をいうと、A・Dさんはなつかしそうに、自分も早口のスペイン語で、おばあさんと話しました。A・Dさんも母国語はスペイン語なのでしよう。といっても、かれがスペインの人とはかぎりません。中南米をはじめ、世界にはスペイン語を使っている国がたくさんありますから。

A・Dさんはもう一つの手荷物の、書類入れだけはそばから離さず、シートに腰をおろすと、それをしっかりとひざの上にのせました。

日本ではゴールデンウィークがすぎましたが、機内はなかなか混んでいます。お客が次つぎに乗りこんできます。

A・Dさんのうしろの席には、目鏡をかけた、中年の日本人らしい男の人がすわりました。この人もA・Dさんに負けずに、キチンとした身なりをしています——少しまついい目つきが気になりますが。そして、この人もA・Dさんと同じような黒革のバッグを肩からさげています。おやおや、名札のイニシャルまで、同じA・Dですよ。



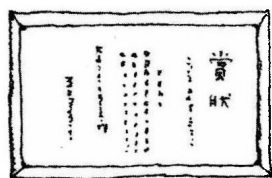
でも、黒革くろかわのバッグはありふれたものですから、こういう偶然ぐうぜんがあつてもしかたがないでしょうね。

うしろの紳士しんしも、バッグを肩かたからおろすと、上の荷物入れにしまい、ゆつたりとシートに腰こしをおろしました。

やがてジェットエンジンがうなりをあげ、ジャンボ機はゆつくりと、離陸のための滑走路かつそうろに移動をはじめました。

これから、給油地アンカレッジを経て、新東京国際空港へととびたっていくのです。
ボン　ボアイヤージュ！（よいご旅行を。）

1 デントウとホコリ



村崎めぐみは、けさはいつもの登校時刻より一時間早く、七時すぎには家を出た。

めぐみの通う並木小学校までは、家から歩いて十分もかからない。ふつうなら、八時三十分の朝の会に、八時に家を出てもじゅうぶんまにあう。きょうは特別だ。土曜日だから。どうして土曜日は早く登校するかって？ ま、あせらないで。

東京郊外といっても、このあたりは都心に近いから、午前七時はまだ通勤や通学の人を出はじめていない。五月のさわやかな風の通る町は静かなものだ。

お向かいの黒田家もまだ家じゅう眠っているらしい。わんぱくの太郎ちゃんも床の中かな。おとなりの青柳さんの家の前へ来る。フェンスごしに、ワンワンと犬がなく。これは青柳家の飼いかのマルのあいさつ。柴犬の雑種だが、めぐみにはよくなついて

いる。

「マル、おはよう。」

マルのうしろから、青柳さんのおばさんが洗濯物せんたくものを入れたかごをもってあらわれた。

「おばさん、おはようございます。」

「あら、めぐみちゃん。けさは早いね。」

「ええ、音楽クラブの早朝練習があるのです。」

「まあまあ、小学校もなかなか、たい……あ、マル、だめよ。洗濯物せんたくものをくわえていって。せっかく洗あらったのに……ええつと。そう、小学校も、なかなかたいへんね。」

おばさんは、とびはねるマルの頭をコツンとやりながら話をつづけた。

「じゃ、がんばってね。いつてらっしゃい。」

「はい、いつてきまーす。マル、いつてくるわよ。」

いい気持ちで、この間習ったマーチをハミングしながら、もう少し先の明石家あかしのそばまで来た時、めぐみの足はとまってしまった。

（会いたくないんだなあ、あの子には。）

いま、門をあけて出てくるのは、この家の次男、明石修君。めぐみと同一年の小学六年生。同じ学年の二人なら、にっこりと「おはよう。」とあいさつをかわすのがふうでしょ。

けど、現実^{げんじつ}は、こっちも向こうも、不自然に目をそらし、明石君、口をへの字にまげて、めぐみの前を通りすぎたのである。

ハーン、二人は大げんかをしたのかって？ いいえ、そんなこと全然^{ぜんぜん}。

そもそもこの二人、この五年ほどの間、口をきいたことさえないのだ。

第一、この二人、同^お学^い年^いではあっても、同級生——同じ学校の生徒じゃないんだもの。むかし、幼稚園^{ようちえん}の時は同園児^おで、そして大^おの仲^{なか}よしだったけれど。

つまり、明石君はいまを去る五年前、ということとは小学校入学のとき、めぐみたち公立小学校へ入学した仲間^{なかま}とサヨナラして、都心にある私立の青空学園小学校へ行ってしまったのだ。

「あなた、明石さんでは修さんを青空学園におあげになったのよ。小さいうちからそんなに遠くの学校へやらなくてもよろしいのにね。不自然ですわね。」

当時、めぐみのお母^{かあ}さんは、お父^{とう}さんにそんなふうに話していた。

めぐみは……お母^{かあ}さんに賛成して、というのは表向き。本音はやっぱし、私立小へ行くの、ちよつとカツコよくてうらやましいという気持ちがあつた。(いや、お母^{かあ}さんだってそうかもしれない。)そして、その気持ちは、おさまるところか、毎年つよくなつてくみたい。でも、私立つてお金かかるし、モロモロの事情がどの家にもあるから、めぐみは私立小に行こうなんて思わない。でも、そのぶん明石君にツンとするようになった。

明石君のほうでも、めぐみの気持ち^{ふたり}が伝わるのか、向こうもヨソヨソしくなつた。二人は会つてもほんの申しわけに「おはよう」とかいうだけになつた。

そして去年からはそれさえしなくなつた。

けさのように、たまにバツタリ会つても、ごらんのとおりの氷のフンイ気。ふたりの間に何があつたのか？

そのとき、

「あらあ、明石君。おはよう。」

